

コリント人への手紙第二11章2-3節 「清純な花嫁」

1A 妬みの愛 2

1B 婚約した花嫁

2B 夫キリストに献げる父

2A 蛇の悪だくみ 3

1B 汚される思い

1C 様々な議論

2C 高ぶり

3C はかりごと

2B キリストに対する真心

1C 福音の純粋性

2C 十字架につけられたキリスト

3C 福音による救い

本文

コリント人への手紙第二 11 章を開いてください。私たちの聖書通読の学びは、前回で 10 章まで来ました。今日は午後礼拝で、11 章を一節ずつ学びます。今朝は、2-3 節に注目します。「² 私は神の熱心をもって、あなたがたのことを熱心に思っています。私はあなたがたを清純な処女として、一人の夫キリストに献げるために婚約させたのですから。³ 蛇が悪巧みによってエバを欺いたように、あなたがたの思いが汚されて、キリストに対する真心と純潔から離れてしまうのではないかと、私は心配しています。」

パウロは、コリント人への第二の手紙で、最後の 4 章を、コリントの人々の背後にいる、偽使徒たち、偽教師たちに対峙するために費やしています。コリントの教会で大きな混乱が生じ、いろいろな問題が起こりましたが、その背後にいるのは、これら偽使徒たちが煽ったからです。パウロは、彼らの自分に対する信頼が揺らいだところを、何とかして回復させ、そして、彼らが正しく応答したので、その信頼の中で、一部に未だ残っている不従順を罰する用意をしていることを告げます。このようなことを用意する、パウロの思い、心が、今、読んだところに書いてあります。パウロにとってコリントの人たちは、父親が自分の娘を嫁に出すようなものです。自分が福音を語って、それで彼らが信じて、そして教会が生まれました。信仰による父であり、彼らをそのようにして愛しています。けれども、今、偽使徒たちによるサタンの惑わしによって、その純粋さが汚されようとしています。そのことを彼が心配しています。まるで婚約した娘が、他の男に誘惑され、その貞潔を台無しにするような恐れ、心配です。

1A 妬みの愛 2

1B 婚約した花嫁

私たちは、先週火曜日に、カルバリーチャペル・ジャパン・カンファレンスに参加することができました。あいにくオンラインでの開催でありましたが、教会に集まって、共に賛美し、みことばを聞き、それから分かち合いの時を持つことが出来ました。ヨナ書に流れているテーマは、もっぱら、すべての人を救う、神の憐れみです。自分たちに酷いことをした敵でさえ、神は憐れみをかけてくださっているということです。このような、純粋な福音を聞くことができ、霊と魂が喜びました。

これは云わば、「花嫁として、花婿のために整えられている」と呼んでよいでしょう。「エペ 5:25-27 夫たちよ。キリストが教会を愛し、教会のためにご自分を献げられたように、あなたがたも妻を愛しなさい。26 キリストがそうされたのは、みことばにより、水の洗いをもって、教会をきよめて聖なるものとするためであり、27 ご自分で、しみや、しわや、そのようなものが何一つない、聖なるもの、傷のないものとなった栄光の教会を、ご自分の前に立たせるためです。」

私たちとキリストとの関係は、妻と夫の関係に喩えられています。私たちがキリスト者になるとは、この方に結ばれた者になることです。この方が十字架で死なれて、葬られたのは、私たちが罪に支配されている古い人が死に、葬られました。そして、この方が死者の中からよみがえらえたのは、私たちも、新しいのちにあって生きるようにされたことを示しています。もはや自分が生きているのではなく、キリストが私たちの内に生きておられ、自分を愛し、自分のために死んでくださったキリストを信じる信仰で生きているのです。

そして主は、教会のために戻って来てくださいます。これをしばしば携挙と呼びますが、携え挙げるといって、主が私たちを引き取ってくださり、天にあるご自分の父の家に連れて来てくださるのです。「ヨハ 14:2-3 わたしの父の家には住む所がたくさんあります。そうでなかったら、あなたがたのために場所を用意しに行く、と言ったでしょうか。3 わたしが行って、あなたがたに場所を用意したら、また来て、あなたがたをわたしのもとに迎えます。わたしがいるところに、あなたがたもいるようにするためです。」当時、ガリラヤ地方にいるユダヤ人たちは、婚約した花嫁を、花婿が自分の父の家に連れてくることによって、結婚を迎えます。父の家に、部屋を新たに増築して、そこを将来の夫婦の部屋とします。そして、婚姻のすべての準備が用意できたら、父が「行きなさい」という命令で、角笛を吹きながら行列が、花嫁の家まで行くのです。花嫁の家では、すべてを整えて、乙女たちも油に火を灯して待っています。それで、大声や角笛の音が聞こえたら、すぐさま立ち上がり、花嫁のために用意された乗り物に乗るのです。そして、夫の家に入り、婚姻の期間を過ごすのです。これが、イエス様が弟子たちに言われた、「わたしの父の家には住む所がたくさんあります。…わたしが行って、あなたがたに場所を用意したら、また来て、あなたがたをわたしのもとに迎えます。わたしがいるところに、あなたがたもいるようにするためです。」ということです。

そして、夫であるキリストが来られるまでの間、花嫁である教会は、この方に引き取られるのを待って、整えられるのです。それが、「みことばにより、水の洗いをもって」ということです。このようにして、聖なる者とされて行き、その傷のない、汚れのない清純な姿で主の前に出ていくことができます。私たちは、みことばによって洗われて、聖なる者とされていくのです。そして、私たちは救いの喜びの中で、事実、天から戻って来られる主にお会いし、そして天において主との婚姻にあずかるのです。だから、聖書の最後、黙示録 21 章の終わりには、「御霊と花嫁が言う。『来てください。』『しかり、わたしはすぐに来る。』アーメン、主イエスよ、来てください。」という掛け合いがあるのです(17,20 節)。

2B 夫キリストに献げる父

パウロは、このような思いでみことばを教えていきました。その思いは、まるで、嫁ぐ人が決まって、その男性の手に渡るまで、しっかりと見届けている父親のようです。それまで、きちんと娘が守られているように、細心の注意を払います。教会の牧者もそうですが、自分より後に救われた人を見ているクリスチャンであれば、同じ思いを抱いているのではないのでしょうか？せっかく信じたのに、世の思い煩いや誘惑に巻き込まれて行くのを見たら、とっても悲しいです。そして、もしその人が、福音とは異質な教えに引き寄せられていくのであれば、気が狂わんばかりになるのではないのでしょうか？それがまさに、パウロがコリントの人たちに抱いている感情なのです。せっかく、夫キリストに結ばれることが決まっているのに、別の男に行ってしまうような妬みの感情です。

パウロは、ここで「私は神の熱心をもって、あなたがたのことを熱心に思っています。」と言っています。ここの「熱心」は、「妬み」と訳すことのできるギリシア語です。神の妬みをもって、あなたがたのことを妬ましく思っています、と訳すことのできる言葉なのです。妬みというのは、悪い感情、罪なのではないか？と思うかもしれません。もし、他の人の持っているものや、その人の成功を妬んでいるのであれば、それは罪です。けれども、主によって与えられ、愛している者が、他のところに行ってしまう時に抱く妬みは、愛ゆえの妬みです。自分の愛している娘が、見知らぬ男に凌辱されているのを見たら、父は激しい怒りをもってその男を殴りつけ、自分が死んでも戦うことでしょう。他の男のところに行ってしまう妻が、妬みを抱くのは当然ですし、その逆も同じです。もし、他の男のところに行っているのに、自分は寛容にならないといけないとして、良いんだよと言ったら、その愛こそ、ものすごくおかしいのです。パウロが、偽使徒たちに対して抱いている妬みは、そのような妬みです。真実な愛には、妬みがあります。

主が、十戒の中で偶像を造ってはならないと言われましたね。その理由を、語っておられます。「出 20:5-6 それらを拜んではならない。それらに仕えてはならない。あなたの神、【主】であるわたしは、ねたみの神。わたしを憎む者には父の咎を子に報い、三代、四代にまで及ぼし、6 わたしを愛し、わたしの命令を守る者には、恵みを千代にまで施すからである。」私たちは、神の愛について語る時に、妬む愛であることを忘れてしまいます。エレミヤ書などに書かれている、神の燃える

ような、ユダに対する厳しい言葉は、ここまで背信しているユダであっても、それでもお見捨てにならず、何とかして立ち直ってほしいという熱情をもって語られているのだということを覚えていないといけません。愛していないならば、とっくの昔に見向きもせず、無視することでしょう。しかし、預言者たちがイスラエル人たちに語り、またイエス様ご自身が厳しく語られている言葉は、妬み愛で愛しておられるからです。

2A 蛇の悪だくみ 3

1B 汚される思い

そして、パウロが心配しているのは、「蛇が悪巧みによってエバを欺いた」ように、と言っています。そして、欺かれた結果、「あなたがたの思いが汚されて」しまうのでは？と言っています。蛇が、どのようにして欺いたのか？それはエバを惑わし、そそのかしたからに他なりません。今、コリントの人たちも、偽使徒たちによって惑わされています。具体的には、次の言葉を蛇が言いました。「創世 3:1 園の木のどれからも食べてはならないと、神は本当に言われたのですか。」神のことばを疑わせています。そして、「3:4 あなたがたは決して死にません。」と言いました。これは偽りです。みことばに対抗して、偽りを言っています。それから、「3:5 それを食べるそのとき、目が開かれて、あなたがたが神のようになって善悪を知る者となることを、神は知っているのです。」こうやって、神からエバを引き離し、自分のほうに引き寄せるべく、企んだのです。こうやって、エバの思いを汚しましたが、コリントの人たちも汚されていくという心配をしています。

パウロは、偽使徒たちがサタンのしもべであると、はっきりと述べています(Ⅱコリ 11:15)。10章では、霊の戦いを次のように語りました。「10:5 私たちは様々な議論と、神の知識に逆らって立つあらゆる高ぶりを打ち倒し、また、すべてのはかりごとを取り押さえて、キリストに服従させます。」偽使徒たちが行っていたのは、この三つのことです。様々な議論、神の知識に逆らう高ぶり、そして、はかりごとです。蛇がエバを欺いた時と同じですね。

1C 様々な議論

様々な議論とありますが、議論そのものが悪いことでは、もちろんありません。「箴 27:17 鉄は鉄によって研がれ、人はその友によって研がれる。」という言葉があります。けれども、神のみことばを純粋に信じ、神の福音を素直に受け入れている人々に向かって、神学議論をふっかけて来る人々がいます。そして、そうした議論によって、神のことばを純粋に信じることを壊そうとする議論があります。あたかも、あなたがたはまだ真理を知らないのだと言わんばかりに語り、純朴な人々の信仰を揺るがしていくのです。

パウロが、若い牧者テモテに、エペソにおいて、そうした者たちに立ち向かうように命じています。「Ⅰテモ 1:3-4 私がマケドニアに行くときに言ったように、あなたはエペソにとどまり、ある人たちが違った教えを説いたり、4 果てしない作り話と系図に心を寄せたりしないように命じなさい。そのよ

うなもの、論議を引き起こすだけで、神に委ねられた信仰の務めを実現させることにはなりません。」まことしやかに、議論をしている人々がいたら、その時に気を付けてください。そのような知識をひけらかして、まずみなさんに行おうとしているのは、劣等感を植え付けることです。「あなたがたは、まだ真理を知らないのですよ。知識が足りません。そんな単純に信じているだけでは、足りないのですよ。」という劣等感を植え付けます。けれども、決して騙されないでください。パウロは、続けて、テモテにこう言っています。「1:5 この命令が目指す目標は、きよい心と健全な良心と偽りのない信仰から生まれる愛です。」知識と呼ばれているものによって、空しい議論に迷い込むことになりませんが、みなさんが、みことばを聞いて、自分の足りなさを明らかにされ、清めていただく。良心が明らかにされて、主に従いたいと願う。そして、信仰が生まれてそこから愛が呼び覚まされる。こういったことをやっている、みなさんのほうが、はるかに、神の知識を持っているのです！

2C 高ぶり

次に、神の知識に逆らう高ぶりについてですが、同じ第一テモテで、パウロは、このような知識を振りかざしている者たちについて、こう語っています。「6:3-5 違ったことを教え、私たちの主イエス・キリストの健全なことばと、敬虔にかなう教えに同意しない者がいるなら、4 その人は高慢になっていて、何一つ理解しておらず、議論やことばの争いをする病にかかっているのです。そこから、ねたみ、争い、ののしり、邪推、絶え間ない言い争いが生じます。」高慢になっているから、イエス・キリストの健全なことばに従えないんですね。

こうした議論をしている人たちは、自分に新しい教えが与えられて、「こんなこと教えられていなかった。周りの人々に教えなければ。」となって、福音をまだ知らない人々に伝道するのではなく、あたかもまだ、真理の半分しか知らないかのように、すでに信じている人々に伝道のようにして教えて行こうとします。そういう熱意に対して、私たちは警戒しないといけません。こう問わないといけないんですね。「はたして、自分が熱意を持っているその新しい教えによって、自分自身がどれだけキリストの似姿に変えられているのか？」ということです。自分が知識を持っていると自負するならば、その知識がキリストの似姿にどれだけ役立っているのかを問いたですとよいのです。健全なことば、敬虔にかなう教えというのは、そういったものです。知識は人を高ぶらせますが、愛が人を育てます(1コリ8:1)。

3C はかりごと

そして、続けて第一テモテ 5 章には、議論をしている者は、「5 これらは、知性が腐って真理を失い、敬虔を利得の手段と考える者たちの間に生じるのです。」と言っています。自分たちに、隠れた動機があるのです。それは、キリストに人々を近づけさせようとするものではなく、自分自身に引き寄せようとする、敬虔を利得の手段としようとしているのです。教会であれば、それはキリストがかしらとなっている、キリストのからだです。けれども、キリストご自身ではなく、カリスマ性のある、影響力のある人につながるように仕向けて行く、これはその教師が、偽物であることを示す、

大きなしるしです。そして、この、「キリストではなく、指導者につかせる」ということが、今でいう社会的なカルトと同じことをしていきます。20 節にこうあります、「11:20 実際あなたがたは、だれかに奴隷にされても、食い尽くされても、強奪されても、いばられても、顔をたたかれても、我慢しています。」

2B キリストに対する真心

1C 福音の純粋性

パウロは、コリントの人たちが、「**キリストに対する真心と純潔から離れてしまう**」ことを心配しています。そうした様々な議論を人々が行っている中で、私は大きな疑問を持ちます。「福音を、まだ知らない人々に伝えればよいのに。」ということです。パウロも、テモテ第一で、続けてこう言っています。「I テモ 1:15 「キリスト・イエスは罪人を救うために世に来られた」ということばは真実であり、そのまま受け入れるに値するものです。私はその罪人のかしらです。」パウロは、このようにして、キリストが、罪人を救われるために世に来られたという真理を伝えるために、召されていることをわきまえていました。私が、毎週のバイブルカフェで、道を歩いている数多くの人々の顔を見て、それで思います。イエス様の心は、言い争いが起こっている様々な議論の中にはなく、これだけの多くの人々がまだ神とキリストを知らず、失われているということです。

2C 十字架につけられたキリスト

神は、キリストの福音を、真心からのものとして定めておられます。言い換えると、世には愚かなように見えるものです。世から見ると、弱く見えるものです。自分は、雄弁さや、世の知恵ではなく、十字架につけられたキリストを宣べ伝えることを、パウロは言いました。そして、選ばれた人、召された人々がどういう人について、コリント第一で話しています。「1:26-28 兄弟たち、自分たちの召しのことを考えてみなさい。人間的に見れば知者は多くはなく、力ある者も多くはなく、身分の高い者も多くはありません。27 しかし神は、知恵ある者を恥じ入らせるために、この世の愚かな者を選び、強い者を恥じ入らせるために、この世の弱い者を選びました。28 有るものを無いものとするために、この世の取るに足りない者や見下されている者、すなわち無に等しい者を神は選ばれたのです。」私たちは、弱い者、取るに足りない者、身分の低い者、世において愚かな者であって、神は敢えてそういった私たちを選ばれたのです。それは、そのことによって、知恵と呼ばれる者を愚かにして、力ある者を弱くするためです。

3C 福音による救い

そして、神は、この福音を、信じて受け入れるだけで救われるようにしてくださいました。「I コリ 15:2-4 私がどのようなことばで福音を伝えたか、あなたがたがしっかり覚えているなら、この福音によって救われます。そうでなければ、あなたがたが信じたことは無駄になってしまいます。3 私があなたがたに最も大切なこととして伝えたのは、私も受けたことであって、次のことです。キリストは、聖書に書いてあるとおりに、私たちの罪のために死なれたこと、4 また、葬られたこと、また、

聖書に書いてあるとおりに、三日目によみがえられたこと、」キリストが私たちの罪のために死なれました。そして葬られて、三日目によみがえられました。悔い改め、この福音を信じて、それで救われるのです。これだけ純粋な福音です。

清純な花嫁として、みことばによって、聖なる者とされていきましょう。みなさんの愛する主は来られます。この純粋さを汚されることのないように、自分の思いを守っていきましょう。むしろ、みことばによって洗い清められて、間もなく来られるイエス様への愛を培っていきましょう。